近代地域医療の形成に関与した医療提供者とその周辺

ー小寺家文書をてがかりに―

宮崎学園短期大学　　就実短期大学

黒野　伸子　　大友達也

Ⅰ はじめに

幕末から明治維新にかけて全国的に医学は西洋化が進んだ。しかし当時は衛生観念が低く、赤痢、腸チフス、ジフテリアなどの感染症が流行した時代でもあった。これらの感染症は一度罹ると命の危険にさらされる。根岸（1991）は、住民たちが西洋医学導入以前から伝承されたさまざまな医療を行うことによって病苦を克服してきたと述べている[(1)]。衛生管理の重要性を重く見た長与専斎らは「衛生」概念の普及を進め、明治 10 年代ごろから各地域に衛生委員が設置されるようになった。地域の医家や教導者たちは感染症の脅威にさらされながらも、地域の安全を守るために奔走していた。西洋医学を基本とする新たな医療制度は明治 7（1874）年に導入されたが、感染症予防の啓発や西洋医学の啓蒙活動等「幾多の困難と努力」を経て新たな医療体制として地域に根ざし、現代に受け継がれてきた。また、この時期は衛生観念が低く、赤痢、腸チフス、ジフテリアなどの感染症が流行した時代でもあった。まさに感染症との闘いの時代であり、「医師」「行政関係者」「有志者」を中心とした活動が進められていた。種痘が急速に広まったのも明治に入ってからであった。

「衛生」概念の普及を進めた長与専斎らの活動は、感染症からの危険を回避し、地域の安全を守っていたのである。しかし、住民は「未知の病」への恐怖から逃げるために呪術に頼ることが多かった。古代から、病気やけがの治療は「医師」の施す医学的治療と「験者（げんざ）」や「陰陽師」などの呪術的職能者による呪術的治療が重層的に行われていた[(2)]。

本稿では、岐阜県大垣市周辺に伝播する呪術的治療も踏まえ、西洋医学を軸とした地域医療の形成に関与した過程を概観するものである。呪術的治療については、野間家、大塩家の資料を参照した。

なお、小寺家文書については拙著[(3)]に詳述しているので参照されたい。

Ⅱ 小寺家文書の歴史的価値について

小寺家文書は岐阜県大垣市の旧家小寺家に伝来し、大垣市が所蔵する 8937 点に及

ぶ資料群である。小寺家は、美濃国石津郡時・多良郷を支配した旗本高木家の旧家臣の家筋にあたり、文書群は現当主小寺登氏の代まで当家で保管されていた。
本研究の一次資料として使用した近代文書について、小寺家文書目録を作成した石川（2012）は小寺家文書を登氏の祖父にあたる弓之助とその家族の活動の集積である、と評価している[(4)]。保存状態は良好であるが、最も価値が高いのは領収証、明細書、書付、下書きに至るまで捨てずに残されていたことである。散逸を免れた貴重な文書は、当時の生活様式を余すところなく今に伝えている。特に当主弓之助とその家族が書き継いだ小寺家日誌は、感情を交えずに事実のみが整然と記載してあり、歴史的事実の検証に耐え得る正確性を備えている。

Ⅲ 小寺家と野間家の概要

小寺家は、美濃国石津郡時・多良郷（現在の岐阜県大垣市上石津町域）を支配した旗本高木家の旧家臣の家筋にあたる。小寺家は高木家陣屋跡からほど近い場所に現在も所在する。林平（文化 12〈1815〉年～明治 28〈1895〉年）の時代に明治維新を迎え、その跡を長男の弓之助が継いだ。本研究で用いた文書群は現当主小寺登氏の代まで当家で保管されていた。現在は大垣市教育委員会が所蔵する 8937 点に及ぶ資料群である。

野間家は、尾張藩奥医師（野間自求）の家系で。初代林庵は町医師であったが、1722（享保 7）年頃には二代目林庵が側医・奥医師に昇進したようである。その後も奥医師、番医師、寄合医師として 300 石の知行を得ていたようである。野間家には医療に関する 990 点ほどの資料が伝来しており、書写された製薬書・医学書などもみられる（図 1）。野間家では「紫雪（しせつ）」「沃雪（ようせつ）」「荊花膏（けいかこう）」「反魂丹（はんごんたん）」などの製薬も行っており、製薬の都度縞 1 反を下賜されていた。「反魂丹（はんごんたん）」は現在でも販売されている。

Ⅳ　上石津地域における地域医療形成過程

明治 20 年代に上石津地域では赤痢が流行し始め、明治 29（1896）年の死者は 169 名に達している。この頃から衛生組合が設立され、組合事務所には「石灰」「生石灰」「石灰酸」等が感染症予防品として常備されるようになった。明治 30 年代に入ると一ノ瀬村、多良村、時村などに隔離病舎の建設が始まり、昭和 20～30 年代までその役割を果たしていたようである。

このように、当該地域では明治維新直後の比較的早い時期から感染症対策が進められていたが、特筆すべきは種痘の早期開始であった。西脇秀策（後改め秀挺）は種痘の重要性を訴え、嘉永 5（1852）年には「岐阜種痘所」を開設している。明治初期には９名の種痘医を数えることができる。秀策の弟西脇友輔も種痘の普及に尽力した一人である。このような動きを的確に進めるために、各地では警察が介入して対処にあたっていた。笠原（2007）によれば、民衆は決して協力的ではなかった。患者の隠匿や酷い風説の中にあっても、警察の力は感染拡大の措置に大きな効果があったのであ

る[5]。小寺家文書には西脇友輔の発行した種痘証明書が 10 枚余伝来する（図 1）。西脇は、主に上石津地域における西洋医学の伝播に積極的に関与し、併せて地域医を支える在村医として活躍した。小寺家では、明治 30（1897）年伝染病予防法施行前年に家族全員が接種しており、日誌にも家族に接種をさせた旨の記録がある。小寺家が地域の教導者として役割を果たしていたことが伺える。

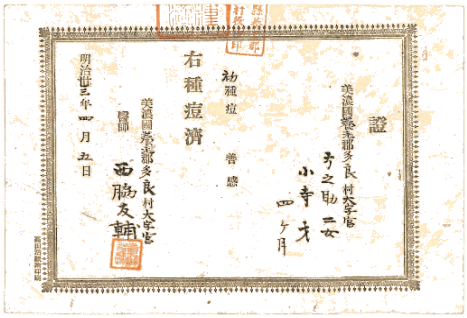

図 1.
小寺弓之助次女の種痘証明書
明治 33（1901）年西脇友輔発行
大垣市教育委員会所蔵
※一部画像処理を施した。

Ⅴ　西洋医学と呪術との共存

大垣市は、早い時期から西洋医学を受け入れ、上石津地域でも種痘の積極的な実施がなされていたが、その一方で、呪術も広く行われていたようである。本項では、その様子を概観し、医術との共存の様子を明らかにしたい。

まずはじめに医術と対をなす「呪術」について定義し、その用例を挙げる。呪術は、基本的に呪術的職能者による「加持」「祈祷」「まじない」をさすこととする。しかし、これらを実施する者は一般民衆であることも多いため、本稿では呪術的職能者が指導的立場に立って一般民衆に広めたものも含めることとする。

図 2「包紙」
代々家伝薬方を渡されたと記されている
野間家文書（野間 2-172）

呪術の代表的な例として平易に行える「まじない」がある。尾張藩士大塩家に伝来した「妙薬聞書」にも多くのまじないが書かれている。疱瘡にかかったときは、小豆一つかみを塗盆に載せて病人の枕元に置き、「石になれ芋になれ」と唱えて、右廻りに盆を廻すと軽症ですみ、病人がかゆがらない[6]という内容があるが、このまじないは科学的治療の補助として用いられていたようである。

医家である野間家でも、医師の治療効果を高めるためにまじないを積極的に受け入れていたようで、科学的治療との対立はみられない。

Ⅵ　野間家文書、小寺家文書、大塩家文書にみるまじないの共通性

野間家文書には、虫歯の痛みを取り除くための「まじない」の方法について記した史料が残されている（野間 4-215）。本資料は書簡の形式で書かれているので、これによれば、「呪歌を３回唱えながら竹串で作った小刀を三度患部近辺に軽く差し込んだあと、「阿毘羅吽欠娑婆呵」と大日如来をあらわす真言を唱え、竹串を呪文の書かれた三角形の紙に包み住居南方の戸口の鴨居に差する」とある。

小寺家文書の書付（図 3）には右に歯痛のまじないと思われる内容があり「阿毘羅吽欠娑婆呵（ヲンアビラウンケンソアカ）」の真言が見える。「歯の痛みに宜し」までが歯痛のまじないであると思われるが、野間家文書のような詳細な行動指針は書かれていない。「ヲンアビラウンケンソアカ」は共通している。良くなりますように、の意味を込めて使ったのであろうか、決まり文句のようである。

後半は、火傷を治すまじないのようである（図 2）。

図 3「まじないの書付」
歯痛と火傷について書かれている。
筆記者不明　　小寺家文書（10-3）

コノイケニダイ邪（大蛇：黒野注）ヲワシマス三度ヤメズワレズアトツカズ三度右ヤケトニ宜シ
（翻刻：黒野、辻下）

とある。「コノイケニダイ邪ヲワシマス」「ヤメズワレズアトツカズ」という呪歌をそれぞれ３度唱えると火傷に効く、という意である。大塩家文書にも同様の内容がある。

> 「天にます大蛇の捨てをわします、その水つけてあと付ずひりつかず」と呪歌を唱えながら水をかき回し息を吹きかけ、その水で火傷を洗う。あるいは「大そうに大蛇の住ておはします」と呪歌を３回唱え、そのあと「阿毘羅吽欠娑婆呵」と７回唱えると火傷がひりひりと痛まない。

細かい内容は異なっているが、大蛇が介在していることは共通している。呪歌は異

なっているが、伝承者によって異なってきたものと思われる。

小寺家文書には、もうひとつ特徴的なまじない文が残っている（図 4）

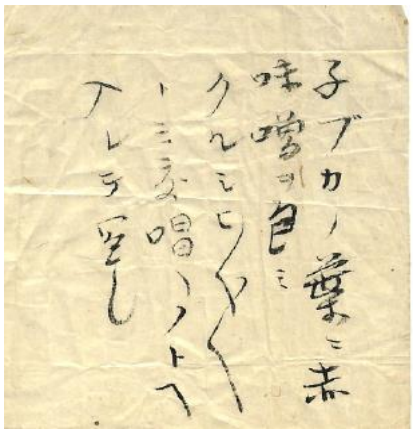

図 4「まじないの書付」
まじないが書かれた書付。効能は不明。
小寺家文書（10-4）

子ブカ（ネブカ）ノ葉ニ赤味噌ヲ包ミ
クルシヒ　　ト三度
唱ヘノトヘ入レテ宜シ
（翻刻：黒野、辻下）

ネブカ（葱の一種）の葉に赤味噌を包み、「苦しい」を三度唱え、喉に入れるとよい、の意であるが、何に効くかは明記されていない。喉が野間家文書
にも大塩家文書にも見当たらなかった。地域性なのか、口伝なのか不明であり、今後の調査を俟たねばならないが、興味深い内容である。

Ⅶ　考察

明治期は急速に西洋化が進み、医療もその影響を受けている。小寺家文書にも処方箋や薬剤のメモ、診断書が数点あり、小寺家の家族が早い時期から西洋医学に基づいた医療を受けている様子が伺える。小寺家のホームドクターであった西脇友輔も種痘を普及させた功労者である。岐阜県大垣市上石津町域は早い時期から西洋医学を受け入れ、独自の医療圏を形成していたようである。

その一方、簡単な「まじない」による呪術的治療方法も受け入れられており、医術との重層性を確かめることができた。

Ⅷ　おわりに

本稿では、近世近代における西洋医学に基づく感染症対策の様子と、同時に実施されていた呪術的治療の一端を考察した。西洋医学を基礎とした医療体系は明治維新から徐々に整備されていったが、呪術はその中で生き続け、現代に至っている。本稿では近代地域医療を「呪術」というキーワードから考察したが、大垣市一帯に残る医療伝承を詳しくみていくことで、患者側からみた近代地域医療解明の一助になると期待するものである。今後も新資料の発見、未解読資料の調査研究を継続していきたい。

【謝辞】
本稿執筆にあたり、調査研究にご協力くださった旧所有者小寺登様、大垣市教育委員会各位、翻刻に際し、貴重なご助言をいただいた上石津郷土資料館辻下尚毅様に厚く御礼申し上げます。
本研究は JSPS 科研費 JP22K00866 の助成を受けたものです。

【引用文献】
(1) 根岸謙之助（1991）『医療民俗学論』雄山閣、pp.6-7.
(2) 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室（2008）『濃尾の医術－尾張藩奥医師野間家文書を中心に－』pp.38-54
(3) 黒野伸子、石川寛、大友達也（2020）「小寺家文書にみる明治後期の地域医療（2）－明細書から読み解く明治後期の医療費－」『レセプト論考　第 2 号』pp.17-36.
(4) 石川寛編集・解題（2012）『小寺家文書目録』大垣市教育委員会、名古屋大学附属図書館、pp.vi-x.
(5) 笠原英彦（2007）「伝染病予防法までの道のり：医療・衛生行政の変転」『法學研究　加藤久雄教授退官記念号』pp.113-117.
(6) 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室（2008）『前掲書』P.43

【主要参考文献】
・石川寛編集・解題（2012）『小寺家文書目録』大垣市教育委員会、名古屋大学附属図書館、pp.vi-x.
・長田尚子（2004）「近世後期における患者の医師選択」『国立歴史民族博物館研究報告　第 116 集』pp.317-342.
・黒野伸子、石川寛、大友達也（2020）「小寺家文書にみる明治後期の地域医療（1）－日誌から読み解く患家の医療行動－」『レセプト論考　第 2 号』pp.2-16.
・黒野伸子、石川寛、大友達也（2022）「西洋医学の受容過程と近代地域医療の発展－東海地域における医師たちの活動をてがかりに－」『JADP 論文集特別号』pp.1-10.
・新修上石津町史編集委員会編（2004）『新修上石津町史』上石津町教育委員会
・辻下榮一編（1984）『上石津の人物史　明日を拓いた人々』上石津町教育委員会